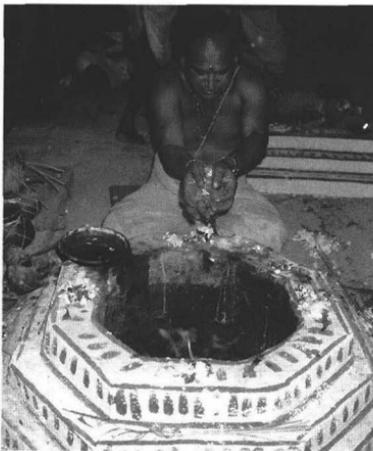


称される数多くの聖典を作り、それを絶対的権威として仰いでいた。

これらヴェーダ聖典にもとづいて発達した宗教はバラモン教と呼ばれることがあるが、ヒンドゥー教とまったく別の宗教ではない。現代でもインドの人たちはこの初期の宗教を含めて全体をヒンドゥー教と呼んでいる。「バラモン教」という言葉はヨーロッパ人研究者の用いた述語「ブラーフマニズム」の訳語で、インドの言葉でそれに近いものはあるが完全に相当するものはない。しかしヴェーダにもとづく祭式万能主義の宗教と、その後先住民の民間信仰と混淆こんごうしつつ多くの思想家や宗教者の教義に裏付けられて発達したヒンドゥー教とを比較すると、宗教形態の上でさまざまな相違が認められるので、バラモン教という概念は有効であると考えられる。

ヴェーダ聖典にはさまざまな祭祀が含まれるが、清浄な場所を選んで祭壇（炉）を造り、特定の神を選んで祭壇の火のなかに供物を捧げ、その後祭壇を取り壊すのが基本である。祭火はその煙とともに天界にいる神々に供物を届けるものとして重視され、火神アグニそのものと考えられた。ちなみに祭火のなかに精製バターや穀物を入れることを「ホーマ」というが、この言葉は仏教で「護摩」と漢訳されて日本にも伝わった。施主は司祭であるブラーフマンを通して神々に子孫繁栄や無病息災、あるいは降雨、豊作、戦勝、死後の生天などを祈願した。ブラーフマンは神々に意思を伝達することのできる存在として、その後のインド社会のなかで絶大な権威を保つこととなった。



ホーマの儀式（タミルナードゥ州）